

南スラウェシのサゴ生産

高 谷 好 一*

Sago Production in South Sulawesi

Yoshikazu TAKAYA*

This is a research report of two sago-villages in Kabupaten Luwu, South Sulawesi. Desa Takkalala, a community which formerly produced sago for subsistence, has been undergoing a drastic change in the last 10 to 15 years due to the improvement of the highway system and the consequent inflow of a large number of Bugis migrants, who are industrious planters of cloves and other cash crops. The market price of sago has risen recently, because the newcomers welcomed this crop as a cheap substitute for rice. But some villagers had already converted their sago forest into banana

and cocoa gardens. They are hoping to transform the village into a sort of truck-farming village where they can grow more valuable crops than sago. In contrast to Desa Takkalala, Desa Pengkajoang remains a genuine sago-village, where sago is the mainstay of life. Besides sago production, villagers rely heavily on raising buffalo and fish. They believe that this is the best combination for tropical lowland, and argue that sago cultivation can be a commercially sound business if a market is secured.

はじめに

スラウェシにおける最大のサゴ生産地は、南スラウェシのルウ (Luwu) 県にある。ルウ県は年降雨量が 3,000 mm を超す湿潤地帯である。しかし、南スラウェシはその全体が湿潤熱帯をなすわけではない。南スラウェシ南部では乾季が卓越し、そこは稲作地を形成している。南スラウェシはこのように南部の稲作地と北部のサゴ地からなっている。

通説によると、現在南スラウェシの主流をなしているブギスやマカッサルが栄える以前には、ルウ地方が栄えたのだという。スラウェシ最初の王朝が生まれるのはルウのパロポ

(Palopo) であり、それは 13 世紀であるといわれている。しかし、同時に、王国といっても、ルウのそれは広大な森とサゴと魔術の国であったともいわれている。この地域が外部に接するようになるのは、20 世紀の初めになってオランダがこの地を征服してからであるという。ここは、オランダ時代以後、籐と樹脂を出す地方として知られるようになった。

ルウ地方に実際に入ってみてその歴史を聞いてみると、すべての人が必ず述べることは、カハル・ムサッカ (Kahar Muzakkar) の内乱のことである。この一種のスラウェシ独立運動はルウには特に大きな爪跡を残した。政府軍に追われた独立派の人たちは、最後にはこの森に逃げこんで抗戦するからである。オランダ時代、一時経済の波に乗るかにみえ

* 京都大学東南アジア研究センター ; The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

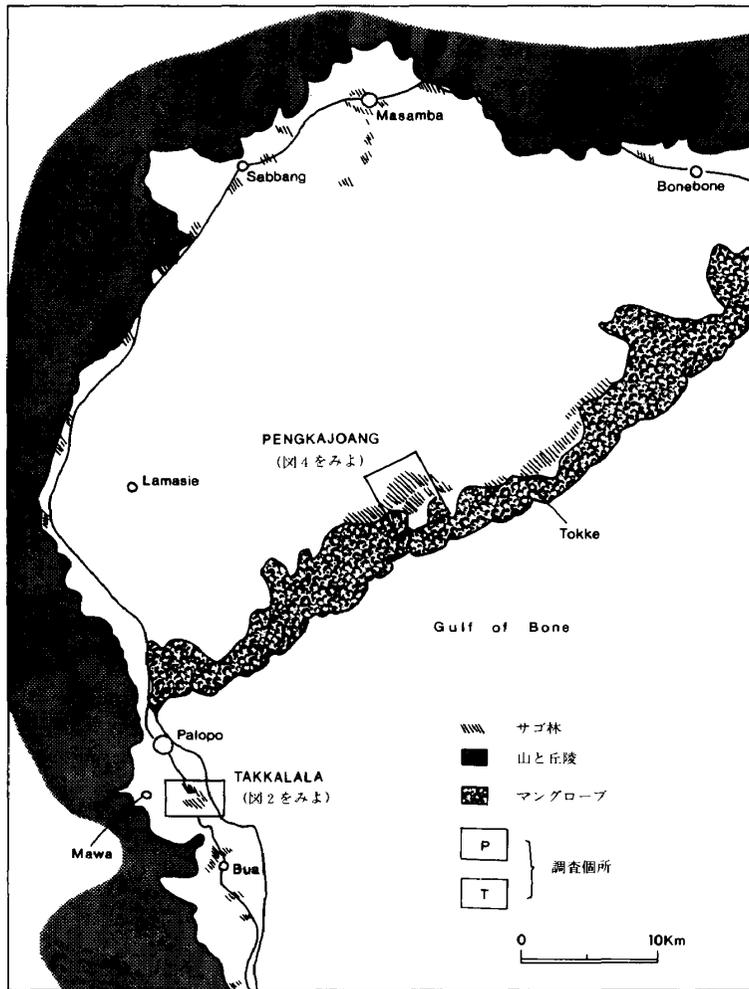


図1 調査地のタッカアラとペンカジョアンの位置，ならびにサゴの分布

海岸地帯である。こうしたサゴの分布は図1に示してある。

こうした全体的な枠組の中で、私はふたつの村を調査の対象に選んだ。ひとつは、タッカアラ (Desa Takkalala, Kecamatan Wara, Kabupaten Luwu) であり、いまひとつはペンカジョアン (Desa Pengkajoang, Kecamatan Malangke, Kabupaten Luwu) である。前者はその生態的立地からいうと、扇状地を流れる小川ぞいのものである。これは同時に幹線道路が通過し、したがって、急速にブギス人植民の起こっている地区にも相当している。一方、後者はマングローブに近い海岸のもの典型である。これは同時に幹線から離れていて、その意味では移民はみられず、いわばより純粋なルウの居住地と考えてよい。しかし、ここはカハル・ムサッカル時代には最後の砦になったところでもある。その意味

では戦乱の爪跡の強く残る地域でもある。

以下、この2調査村についてサゴ生産の現状を述べる。

たこのルウは、第2次大戦後の十数年間は完全な破壊に見舞われるのである。ルウは本来サゴ常食圏である。しかし、内乱の終結後は、南のマカッサルやブギス地方から多量の移民が流入するようになった。人口稀薄なサゴ地帯への、人口ちょう密地帯からの米食民の流入である。1960年代後半以後、ルウ県はこの移民の波に洗い続けられている。特に、自動車の通じる幹線道路ぞいでは、このことは顕著である。

I タッカアラのサゴ生産

この森の世界ルウにおいても、サゴはどこにでもあるというものではない。それは明瞭に2種類の限られた分布域を持っている。第1は山麓であり、第2はマングローブに近い

I-i タッカアラのたたずまい

タッカアラはルウ県の県庁所在地パロポの南5kmのところにある。南スラウェシの主府ウジュンパンダンとパロポを結ぶ幹線ぞいにもなっていて、サゴを生産する村としては交通至便の位置にある。

タッカアラは地形学的にいうと、小さい扇状地の上に位置している。扇頂から海岸まで

の距離は約 6 km である。そして、その上には幅 6 m ぐらいの小川がいくつか流れている。ここには図 2 にも示した通り、海岸から次の土地利用区がある。①海岸砂州ならびにその前面の干潟、②養魚池、③マングローブ、④シダ原、などの海岸に平行な帯状地区と、その西の、⑤屋敷林地帯、⑥水田、それに⑦サゴ林である。以下、ごく簡単に各地区を記載する。

① 砂州ならびに干潟

砂州は 15-20 m と幅の狭いものである。満潮位からは 0.5 m ぐらいの高さを持っている。グンバイヒルガオと思われるものが広がるが、時にココヤシが植えられる。

マングローブの一種ラッセ(lasse; *Avicennia*

sp.) が這いあがることもある。前面の干潟には、波打ち際にベロパ (*beropa*; *Sonneratia sp.*) が、そして、その背後にラッセがある。

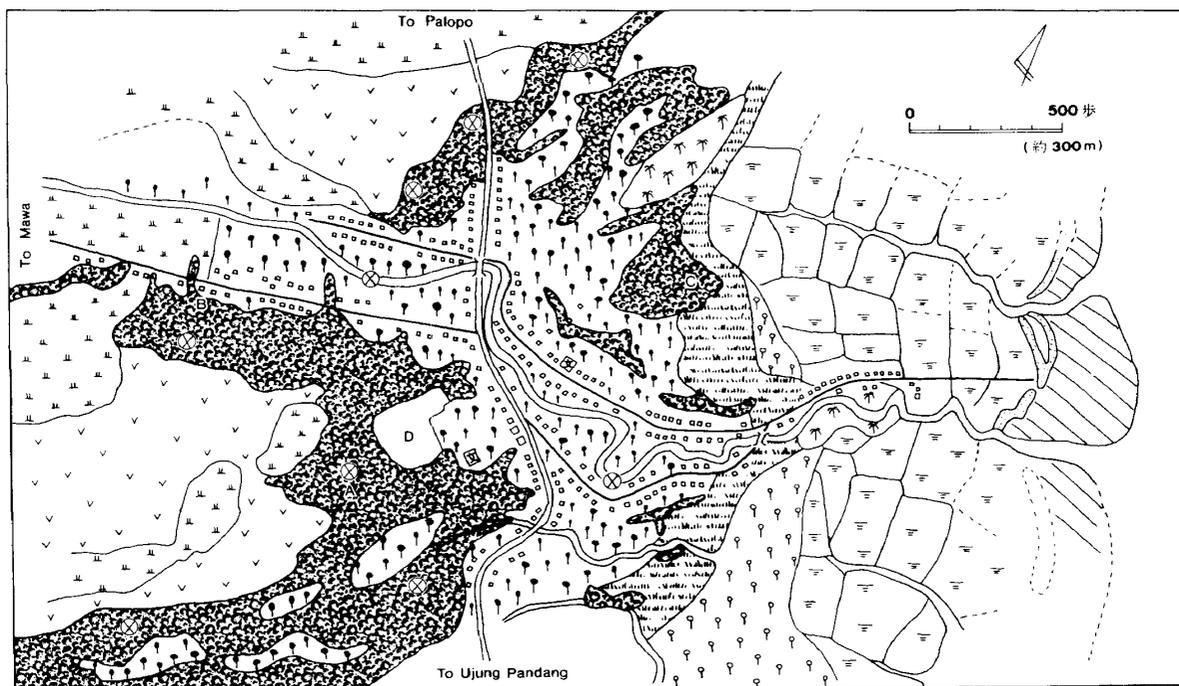
② 養魚池

もとはマングローブ・ニッパ林である。それを伐開し、土手を築いて養魚池としたものである。エンパン (*empang*) と呼ばれていて、主としてサバヒイ (*Chanos chanos*) が飼われている。この集落の重要産業のひとつである。

③ マングローブ

まだ養魚池になっていないマングローブである。トッケ (*tokke*; *Rhizophora sp.*) が優勢種であるが、時にニッパを混ざる。

④ シダ原



▨ 干潟 □ 砂州 ◻ 養魚池 ◻ マングローブ ▨ シダの多い草地 ◻ ココヤシ集中地区
 ▨ 屋敷林 ◻ 家 ▨ サゴ林 ⊗ サゴ採取地点 ◻ 水田 (1981年に耕作したもの)
 ◻ 水田(1981年に耕作しなかったもの) A; 土壌採取点 B; サゴ株立ち記載点 C; 塩水浸入地のサゴ
 D; ココア園への変更区

図 2 タッカララの土地利用

ラッピーオ (lappio) と呼ばれているシダ類が卓越する。これは高さ 1.5 m ぐらいになる。時に、この中に菊に似た草 (*Pluchea indica*) が群落を作る。ところどころにココヤシが植えられている。図2中には、特にココヤシの集中しているところが別に示してある。

⑤ 宅地と屋敷林

これはソンカ川の自然堤防上にある。地盤は砂質である。最も多い木はランサット (*Lansium domesticum*) とココヤシである。ほかに、ドリアン、マンゴー、バナナが多い。ピリンビン (*Averrhoa bilimbi*)、ジャンブー・アイル (*Eugenia aquea*)、ナンカ (*Artocarpus integrata*)、ランブータン、シルサック (*Annona muricata*)、アレカ (*Areca cathecu*) などがある。こうした果樹の樹陰に家々がならぶ。野菜園は皆無といってよい。

⑥ 水田

図2には、前年度耕作されて水田らしく刈株の残っている田と、前年度耕作されず、キャヅリ草で雄大に覆われているところが区別して描いてある。水田耕作に対しては人々は、必ずしも非常に熱心というわけではなく、こうした休耕地が毎年できる。

⑦ サゴ林

自然堤防と後背湿地の漸移地帯に位置していることが多い。この林内で1982年8月15日現在、サゴ採取を行なっている地点が図2には示してある。

以上がタッカララの土地利用であるが、これに関連して村役場に保存されている統計数字には、以下のものがある。

| | |
|------------|---------------------|
| a) デサ総面積 | 約 9 km ² |
| b) 利用別面積 | |
| 宅地 | 65 ha |
| 水田 | 250 |
| 園地 (屋敷林など) | 275 |
| 養魚池 | 195 |

| | |
|-----------------|--------|
| 湿地林 (rawa rawa) | 115 |
| 計 | 900 ha |
| c) 動物 | |
| 水牛 | 135頭 |
| 牛 | 144 |
| 馬 | 3 |
| 山羊 | 169 |
| 豚 | 0 |
| 鶏 | 2,271羽 |
| アヒル | 595 |
| d) 職業 | |
| 農業 | 201戸 |
| 漁業 | 85 |
| 賃労者 | 153 |
| 公務員 | 30 |
| 他国者 | 22 |
| その他 | 21 |
| 計 | 512戸 |

上の統計によると、サゴ林は湿地林という項目の中に入れられている。また、サゴ採取者は農民、漁民、賃労者、公務員などとして示されている。水田耕作者も漁民も賃労者も公務員も、そのほとんどが年のうち何日かはサゴ採取のために働くのである。ほかの仕事は一切行わず、年中サゴ採取のみを行い、それで生計を立てている家は30戸あり、それは賃労者の中に数えられている。

I-ii サゴ採取

サゴ採取はふつう4人が一組をなして行っている。時には3人で行うこともあるし、6人ぐらいで一組を作ることもある。各組は粉碎 (rasping) 用の機械を1台ずつ持っていて、サゴ林中の水のえられる適当な場所にそれを据え、そこをサゴの洗い場に決める。洗い場の水流というのは、ふつう極めて貧弱である。サゴ林中には、川と呼んでよいのか、あるいは一時的な水みちと呼んでよいのかわからないようなものが、3-4 m 幅でところど

ころにみられる。そうしたもののなかで、比較的水量の安定しているようなものを選んで、これを水場としている。時には、乱流してゆく水路をごく簡単に整形して、求めた水場に水がより多く集まるようにしている。こうして、少しは安定した流れにサゴの葉柄で堰 (patampan) をかけ、小さなプールを作って、ここを洗い場としている。

サゴ洗いの原理は簡単である。プールの水をバケツで汲みあげて、サゴの葉柄製のトユに流しこむ。すると、この水はトユの下端にとりつけられた袋に流れこむ。袋には粉碎されたサゴの髓が入れられていて、水を流しこむと同時に、これを力まかせにもむ。すると、水に溶けて繊維から離れた澱粉は袋の細かい目を通して、水とともに下の沈澱槽に落下する。しばらくすると、この沈澱槽の底にはサゴが沈澱するといった具合である。

洗い場にはこの洗滌設備以外に、サゴの髓を粉碎する粉碎機が据えられている。最もふつうの洗い場の設備は、プールのまわりに3組のトユと沈澱槽の組合せがあり、それとは別に、極めて簡単な小屋がけをして粉碎機が1台おいてあるというものである。サゴ林の中に、ふつうは15m四方ぐらいの空地を作って、そこにこの一式の設備をおき、作業を行う。こうした洗い場が数百mずつ離れて作られている。調査時点では、タツカララに12カ所の洗い場があるといわれたが、私は9カ所しか確認しえなかった。

1本のサゴの立木が濡れサゴに精製されるまでには、実際には次のような工程を経る。

① まず立木の切倒し (mallempek) である。これは他の立木を傷めない方向を選んで倒す。ふつう、斧 (wase) で地上50cmぐらいのところから切り倒す。ひとりで約7-8分で切れる。最近ではチェーン・ソーを用いる人が増えてきた。チェーン・ソーだと3分で切れる。

② 倒れた木から葉を切り落とす (dibajai)。これは山刀 (parang) で行う。1本につきひとりで30分かかる。

③ 幹だけになったサゴを、約1mの長さの丸太 (batang) に切断 (mampolo) する。背の低いサゴで10本ぐらい、背の高いサゴだと15本ぐらいの丸太になる。これは斧で行う。ふたりがかりで約1時間かかる。

④ 1mの長さの丸太になったものを洗い場まで運ぶ。このためにはサゴ林中に葉柄を2-3本ずつレール (tete) 状に敷いて、その上を転がせて運ぶ。ひとつの洗い場に運んでくる最遠距離は50mぐらいである。運搬距離によるが、50mだと、4人で1本のサゴの木を運びきるのに半日かかる。

⑤ 洗い場についた丸太は、その皮を斧ではぎ (dikuli)、髓だけにする。さらにこれを縦に割り、数個の角材状のものにする。この角材も batang と呼ぶ。皮はぎから角材までに、1mの丸太1本につき、ひとりで20分かかる。

⑥ 角材を粉碎機 (parut masin) で粉碎して、オガクズ状にする。粉碎機は、直径30cm、長さ70cmぐらいのドラムに、1cm×2cm間隔ぐらいで碁盤状に無数の釘を植えこみ、釘の長さが1cmぐらい出たようにしたものである。このドラムを7.5馬力のエンジンで回転させ、それに角材状の髓を押しつけて粉碎する。こうしてできたオガクズ状のものはサラエン (saraeng) と呼ばれる。粉碎作業はひとりが行い、十数mの1本のサゴを粉碎するのに1時間半ほどかかる。

⑦ オガクズ状のサゴは近くのトユ (sumaka) に運ぶ。運搬にはサゴの葉柄製の2斗ぐらい入るバケツ (basong または rumba) を用いる。バケツ2個をサゴの葉柄で作った天秤棒 (rempa) で運ぶ。運搬距離はせいぜい20mぐらいだから、時間はほとんどかからない。洗滌を行う各人が、ふつうはそれを行

う。

⑧ オガクズ状のサゴをトユの先につけた袋 (kamunto) に入れる。運搬用バケツ半杯分が一度に洗う量である。一荷はしたがって4回に分けて洗う。袋にオガクズ状のサゴを入れると、ニッパの葉で作った水汲みバケツ (tambu) で、川から水を汲み、トユを通じて袋に流しこみ、袋の中のサゴをもみ洗う (mapperra)。これがサゴ精製中、最も手間をとる仕事である。ふつうの立木1本分を洗うのに、3個のトユを利用してほぼ1日かかる。ここでいう1日とは、朝8時に始め夕方4時に終る作業のことである。この間に、昼食の1時間とそのほかお祈りなどの休止で約1時間、計2時間の休止があるから、実労働時間は6時間である。3カ所で洗っているから、1本の木を洗うのに18時間かかることになる。

⑨ 沈澱槽 (bangka または koang) は髓をくりぬいたサゴの幹でできている。たいてい2本分を縦につぎ足しているの、十数mの長さがある。ふつう9日から10日分ぐらいの洗滌を行うと、この沈澱槽は澱粉でいっぱいになる。

⑩ いっぱいになると、底に沈澱した濡れサゴ (tabaro) を、ニッパで編んだ円筒形の俵 (tumang) につめる。1俵は3kgに作る。沈澱槽1杯のサゴを俵づめにするのに、3人で1日かかる。ひとつの沈澱槽がいっぱいになっていると、ふつう300俵のサゴがとれる。

以上が濡れサゴ精製までの工程である。時には沈澱槽がいっぱいにならないでも、仲買人がやってくることがある。こんな時には、まだ途中でも俵づめを開始する。

水場の流れを整備し、トユと沈澱槽を据えつけ、機械を運びこむなど洗い場の建設は、上の工程とは別に、ふたりがかりで約5日間かかる。もし、沈澱槽そのものを新たに作るうとすると、また別にふたりで1週間かか

る。しかし、沈澱槽はたいてい古いものを現場に運びこんで、それを使用する。

一度こうして洗い場が建設され、仕事が始められると、4月から5月ぐらいはそこにいて、まわりのサゴをすべてそこで処理してしまう。この4カ月あまりの間に処理する木は、だいたい70本ぐらいである。こうして、直径100mぐらいの範囲から稼行可能な木を処理し終わると、そこをひきあげて、次の新しい場所に移る。一旦ひとつの洗い場所がひきあげられると、次にその近くへ帰ってくるのは、丸3年後ぐらいである。1地点で1時期に採取されている木は、したがって、樹齢にして3年ぐらいの幅のものを含んでいることになる。

もっともここで少しく註を加えておく必要がある。それは、洗い場のすべてが上に述べたようにサゴ林内にあり、機械を据えたものではないということである。実際には粉碎機を持たない洗い場がある。それは図2中で、ソソカ川の川の中に示された2例である。ここでは洗い場は幅約10mのソソカ川の中にしつらえられている。トユはサゴ林中のものと同じくサゴの葉柄製のものだが、沈澱槽には丸木舟が用いられている。この川筋ならどこでも水は豊富だから、適宜、この川に浮かべた丸木舟を移動させてサゴを洗っている。もっとも、この洗滌法は川が汚れるということ、あまり歓迎されない。

この種の川中の洗い場は、屋敷林中に点在するサゴを処理するのに用いられている。サゴの純林ではないから、切り出せるのはふつうは1カ所で3-4本程度である。こうした少数のサゴのために利用するような機械の余裕はない。したがって、ここでは粉碎は手で行われている。すなわち、切り倒され、葉柄がとり払われると、1mの丸太には切断されないで、長いままで皮がはがされ、長大に横たわったままの髓にかんなをかけるような格好

で粉碎作業が行われる。用いられる道具は、一種のおろしがね (parut) である。これは幅 20 cm, 長さ 1 m ぐらいの厚板に 1 cm×2 cm ぐらいの間隔で無数に釘を打ちつけたものである。この手動のパートでは、1 本の木を粉碎するのにふたりで 3, 4日かかるという。

I-iii 生態

サゴ林は湿地というべきなのか、乾地というべきなのか、その表現に迷う。サゴ林の中に入ると、たしかに多くのところに深さ数 cm から十数 cm の水溜りがある。また、全体に土は湿っている。現地でもサゴ林はラワ・ラワ (rawa rawa) の一種と考えられている。ラワ・ラワとは湿地もしくは湿地林のことである。

乾季でも土の湿っていることが多いから、ラワ・ラワと考えられているのだが、湛水は雨季になってもそう深くはならない。タッカララの場合、雨季でも平均湛水深が 10 cm を超す深さになるようなところはまずないという。水田の多くの部分が湛水深 30 cm 近くになるのに比べると、この湛水は非常に浅いものといわねばならない。湛水深がこうしてあまり大きくなならないことは、その地形的位置からして当然である。先にも触れたごとく、ここは自然堤防と後背湿地の中間帯にあたっていて、水はより低位の後背湿地の水田部へ流出するからである。サゴ林は一度そこが開かれると、たちまちかなりよく乾く土地になってしまう。このことは、タッカララで最近あるまとまったサゴ林をココア園にかえるということで皆伐された時、証明された。それまであった小さな水溜りは消失し、地表は乾いてしまった。こういう性質を持っているサゴ林を、はたして湿地と呼んでよいのかどうかと迷うのである。

最も大きなサゴ団地のほぼ中央と思われるところ (図 2 中には A で示す) での土壤断

面は、以下の通りである。

地表-3 cm : サゴの葉などの集積した腐植層

3-85 cm : 明褐色と褐色の直径 2-3 cm の雲状斑のある灰色の粘土。この中には新・旧のサゴの根が多い。根はいずれも断面直径 5-7 mm。新しいものは黄色だが、古いものは黒色を呈し、時にそのまわりに青灰色の部分がくっつく。非常に湿っているという感じはあまりしない

この断面でみると、土性は粗粒であり、それが自然堤防の堆積物であることを示している。しかし、それにもかかわらず、比較的浅所に多湿を示すグライ色が現れている。密閉した樹冠に厚く覆われた地面は、こういう土壤環境を自ら作り出すのであろうか。

こうしたサゴ林は、その中に入ってみると、5 m から 10 m に 1 株ぐらいの密度で株立ちして生えている。樹冠は密閉していて、上からみると、とうていその中には入れそうにないが、実際に林内に入ってみると、そこは意外に歩き易い。株間が広く、下生えもほとんど生えていないからである。タッカララの場合、その土性のためであろうか、そんなに土がぬかるむということもない。

95%以上のサゴは、何世代も前に植えられたものということで、その来歴は明らかでない。しかし、中には例外的にその起源の明瞭なものもある。図 3 はそうしたもののひとつである。図 3 に示したものは、集落の西端に近い、ある農家の裏庭の実例である (図 2 では B で示されている)。この家は、日本軍駐留時代に新たにラワ・ラワを開墾して建てられたものである。そしてその時、3 本のサゴを植えたのであるが、ここに図示したものはそのうちの 2 本分である。日本軍駐留時代といえ、いまから約 40 年前であるが、この植付け後 13 年ほどしてからのちは、この 2 本分からは毎年ほぼ 2 本程度のサゴを切っている。

時には伐採のない年もあったが、多い年には4, 5本切った年もあったという。

図3で、丸の中に記してある数字はその個体の推定樹齢である。例えば、⑥は生後6年目の個体ということである。この図からすると、約40年前に15mの間隔をおいて植えられた2本のサゴは、その後分けつして、現在では7株に分かれ、その7株は現在では下に示したような樹齢構成になっている。

| | | | |
|------|----|-----|----|
| 12年生 | 1本 | 6年生 | 3本 |
| 11 | 0 | 5 | 1 |
| 10 | 1 | 4 | 3 |
| 9 | 0 | 3 | 11 |
| 8 | 2 | 2 | 26 |
| 7 | 2 | 1 | 50 |

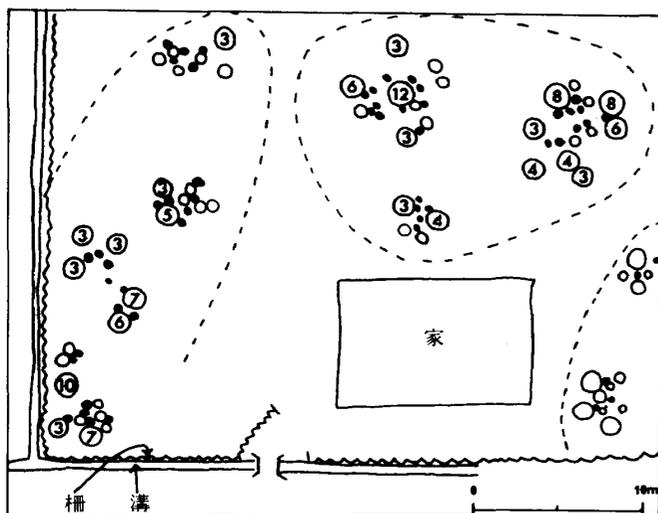
ふつうの林内に入って図3のようなサゴ・クランプの構成とその分布図を作り、例えば、10年生のサゴの本数を数えてみると、1haあたり30本から50本ぐらいになる。いいかえれば、毎年1haあたり30本から50本の成木が

生産されているということになる。仮に1本の成木が300kgの濡れサゴを生産すると仮定すると、haあたりの濡れサゴ生産量は、9tonから15tonということになる。

一方、先にインフォーマントたちが話したように、ひとつの洗い場では、だいたい半径50mぐらいのところから70本のサゴを集めている。これをもとに計算すると、ここで稼行対象になっているサゴの成木密度は、ほぼhaあたり90本となる。彼らは3年に1度切っているということであるから、1年にすると30本ということになり、その年収量は9tonということになる。クランプ分布密度からの計算とほぼ一致することになる。

サゴの吸枝は、最初の3年ぐらいは葉数を増やすが、幹は出さない。早いと3年目ぐらいから、おそくとも4年目には、その中央は幹(batang)を明瞭なかたちで現す。この幹はふつう40cmから50cmの太さがある。そして、一旦幹が現れると、それは急速に背丈を伸ばす。図3からみると、2年生までの個体数は極めて多いが、3年生になるとそれは11個になり、4年生以後は3本以下に減じている。ここでは、時おり行われる屋根葺き用の葉の採取以外、人工的な間びきは全く行われていないが、結果的には、幹の出る段階で個体数の調整が自然に行われているように見える。この幹を出す時期、すなわち4年目ぐらいになると個体数が減少するという現象は、一般の林内でも明瞭に認められるところである。

タッカララではサゴは15年生ぐらいのものを切るのだという。10年生ぐらいでも切れないことはないが、花の咲く直前の15年目ぐらいが最高であるという。彼らにいわせると、10年生のサゴだと、粉碎したオガクズ状のサラエンは1時間もすると赤色に変色し、し



- ⑤ 幹の出ているサゴ。数字は発芽後の推定年数
- 発芽後2年ぐらいと思われるサゴ
- 発芽後1年またはそれ以下と思われるサゴ
- もとは同一の親から出たクランプの一群

図3 約40年前、ラワ・ラワを開いて屋敷地とされたところに植えられた3本のサゴは、いまは十数株になっている

かも、1バソンのサラエンは洗滌後は4分の1バソンになってしまうという。一方、15年生だと変色はそれほど急速には進まず、しかも、1バソンのサラエンからは2分の1バソンの濡れサゴがえられて、歩どまりが高いという。もっともしかし、実際に林地に入ってみて、樹齢をいちいち聞いてみると、15年生などというものにはほとんど出会わない。ほとんどが12-13年生で切られてしまっているようである。

樹齢がサゴ採取に適したものに達しているという判定は、次の諸点を確認して行うのだという。

④ 葉柄の外側に白い斑点が無数に現れる。遠望すると、これは、しみに食われたように見える。近くで手にとってみると、ゴマ粒より少し大きいくらいの粉状の白斑が、表皮に無数についている。

⑤ 若い時には、葉柄の外側背部にあたる場所に、明瞭に通っていた幅2cmぐらいの黒い帯状の線が、成木になると消えてしまう。

⑥ 葉のつき方が、若い時のクンチュップ(kuncup; 直立して空を向いた状態)から、リンダン(rindang; 横に開いた状態)になる。¹⁾

⑦ 1枚ずつの葉が、葉柄も小葉も全体が短く、こぶりになる。

土地の人たちにいわせると、サゴはいかなる土壤条件のところにも旺盛に成長して、結局は広大な純林をなすという。しかし、どこでも同じような生育を示すかというところ、

1) 校正の段階で本稿を佐藤孝先生(神戸大学名誉教授)にみていただいたところ、この記載は、むしろ逆ではないかとのご指摘を受けた。サゴが非常に若い時はもちろん葉は立っており、それが長ずると横に開くのであるが、あるいは、収穫適期が近づくと、再び直立するのもかもしれない。この点に関しての情報にはいささかの不安がある。機会をえて調べなおしてみるつもりである。

うではないという。彼らはサゴをその立地によって3種に分類している。高燥地のサゴ、多湿地のサゴ、海水浸入のおそれのありうる土地のサゴの3種類である。それらは次のような性質を持っている。

④ 高燥地のサゴ

これは自然堤防上の高燥地、例えば屋敷地などにみられるものである。樹高は10-15mぐらいにしかならない。しかし、太さは多湿地のものと同じくらいに太くなる。髓の水分含量は低く、中には白色の上質の澱粉がぎっしりつまっている。

⑤ 多湿地のサゴ

樹高は20m近くに伸びる。高燥地のものと同じく、15年目ぐらいが収穫の適期である。水分含量が高く、したがって澱粉含量が低い。多湿地のサゴのサラエンの3バソンからえられる濡れサゴの量は、高燥地のサゴのサラエン2バソンからえられるものと同ほ等しい。したがって、多湿地のサゴは背丈は高くなるが、澱粉の実質収量となると高燥地のものとほとんどかわらない。髓はしばしば、橙色もしくは薄い赤色を呈している。

⑥ 塩水浸入地のサゴ

図2で、Cと示した地区のサゴなどがこれに入る。乾季に塩水浸入の危険のあるところのサゴである。こういうところのサゴは、ふつうは10m以上にはならない。成長はしばしば途中で中断されて倭生となる。髓はしばしば黒味を帯び、澱粉収量は低い。

タッカララでは、3種のサゴのうち、高燥地のサゴが最もよいものだと考えられている。こうしたサゴは、しばしばドリアンやマンゴーと共生している。

サゴは一般に水洗して精製するものである。しかし、高燥地のサゴの中には時に特別上質なサゴがある。特に中央部の4分の1ぐ

らい、すなわち中位の 3 m ぐらいには水分含量が特に低く、繊維質が少なく、雪のように白い澱粉のつまっていることがある。こういうサゴが見つかり、人々は水洗をしないで、粉碎したあとは、そのまま目の細かいふるいで通して澱粉をえる。極端に水分含量が低いから、サラサラしていて、こうした精製法が可能なのである。ふつうのサゴは湿っていて、こうしたふるいによる選別などはとうてい不可能である。こうしてえたサゴは特別な風味があるというので、すぐに自分たちの家で菓子にしてしまう。市場にはこうしたサゴは出てこない。

タッカラのサゴは、すべてトゲのないサゴである。私は一株だけ 7-8 mm のトゲのあるものをみたが、これは例外であった。

I-iv サゴ生産の変遷

1982年の今日のタッカラのサゴは、10年前の1970年代の初めのころのサゴとは、その意味がかなり違っている。1970年代前半までのタッカラでは、サゴはまだ唯一の主食としての座を占めていた。しかし、いまではサゴはいくつかある主要食糧のうちのひとつになり下がっており、むしろ、産出されるサゴは商品としての意味がより重要になってきている。タッカラの今日のサゴを考える時、このことは知っておかなければならない。

村の言い伝えによると、デサ・タッカラの中心をなすカンボン・ソンカは、ルウ王朝がパロポに都を移す前、まだその宮殿がマランケ（これはタッカラの東北約 40 km のところにある）にあった時、すなわち13世紀に、マランケの人ソンカによって開かれたところであるという。マランケから海を渡ってやってきたソンカは、ソンカ川の河口近くに居を構えたという。そのころはまだ水田は全く知られていなかったから、人々はサゴと魚とココヤシだけで生きていた。

タッカラの生活の状況がもっとはっきりわかるようになるのは、私のインフォーマントになってくれた B 氏（90歳）の4代前のバチョ（Baco）が、パロポからこの地に移り住むようになってからである。これはいまから約 160 年前のことと考えられている。この時、バチョはすでに開けていたタッカラの集落を避けて、そのすぐ上流に居を構えた。現在、タッカラとマワ（Mawa）の中間にあたる場所である。この時、彼は 300 頭の水牛をひきつれてきて、人居と同時に 50 ha の水田を開いている。ここで、300 頭の水牛と 50 ha の水田に関しては、少し説明を加えておいたほうがよい。300 頭の水牛というのは、そのほとんどすべてが周辺のラワ・ラワでの放し飼いであった。それでも家の近くには小さな水牛囲いを作った。それが今日でも、バラ・テドン（Bala Tedong）という地名で残っている。バラは囲い地、テドンは水牛の意である。この水牛囲いはその後放棄され、いまではあたり一帯はサゴ林になっている。水牛は役畜や食用として持ってこられたのではない。一種のステータス・シンボルであり、財産として飼っておかれたわけである。一方、50 ha の水田は自らが耕作したわけではない。当時、ソンカ川の上流山地に住んでいた山の民に耕作させた。耕作条件は収穫の 9 割を耕作者の山の民がとり、1 割をバチョがとるといったものだった。バチョにとっては、米は時たまの儀礼の際に必要なだけだったから、これで十分であった。50 ha の水田が実際にどの程度耕作されていたかは、全くわからない。水田はあったというだけで、バチョたちはほぼ完全にサゴに頼っていたからである。

タッカラが変化をとげるのは、1906年になってオランダがルウを領有してからである。領有直後、ウジュンパンダン・パロポ道はそれまでの馬車道にかえて、自動車道に作りかえられるようになった。籐やコプラが商

品として売れるようになり、この時、サゴも少しだが売れるようになった。こうした品物は新しくできた自動車道で運ばれることもあったが、より多くは、ソンカ川の河口の沖合にとまったスラバヤから来た大船に、小舟で運んで積みこんだ。大船はいろいろな雑貨品を積んでパロポに来たものだった。その中に、しばしばシャム産の米が積まれていた。また時に、スラウェシ南端のジェネポント (Jeneponto) から塩などを積んだ舟がやってきた。彼らはコプラ、籐、それにタンニン用のマングローブの樹皮、サゴを積んで帰った。

サゴはかくして、この時代になると少しは売れるようになった。しかし、その量は極めて限られていた。当時はまだ粉碎用の機械はなく、おろしがね様のパルトもなく、人々はサンベ (sambe) という、ちょうな様のものを用いて、髓をほじくり出すよりほかに方法がなかったからである。これではとうてい量産はできなかった。

オランダ時代の生活でバチョ時代と異なる第2の点は、このころになると彼ら自身が少しではあるが水田を作り出したことである。しかし、米作はまだけっして大きな比重は持っていなかった。あいかわらず、サゴを圧倒的な主食とし、少しずつ籐などの生産物を売って、基本的には自給的な生活をしていった。

第2次世界大戦中もこの生活の様子はあまりかわらなかった。強いてこの時期の特徴を求めるとすると、それは日本軍の奨励による水田の拡充であった。この時、稲生産は以前より増大した。しかし、日本軍が去ると、稲作は再びうとんじられてしまった。

タッカハラが極めて大きな変化を受けるのは、1955年に始まり1965年まで続くカハル・ムサッカルの内乱時期である。この時期には、極めて多くの住民が戦乱を避けて集落から逃れた。残された住民も水田耕作は完全に

放棄した。せっかく努力して育てても、実った稲が自分の手に入るという保証は全くなかったからである。それに第一、水田に出て働くこと自体が危険であった。人々は再び完全にサゴに依存した。一粒の米もなかったが、食生活にそれほど困ることはなかった。

内乱が過ぎると、住民たちは再び帰村してきた。サゴ生産は増加し、水田耕作も再開された。生活は時とともに、再び戦前のそれに近づいていった。しかし、この時には戦前のそれと違って、ブギスの人植者たちが殺到し出した。彼らもサゴを食べたので、サゴ生産は一段と増えた。

タッカハラでサゴが商品として伸び出すのは、1975年になってからである。この年、住民のひとりが粉碎機を手に入れた。彼は、ルウ島の主要サゴ産地のひとつであるウォトゥ (Wotu; タッカハラより東北東70 km) で、この機械の使用されているのを見て、そこから購入してきた。それまでの手びきのパルトに比べると、このエンジンで回転する粉碎機は比較にならないくらい大きな粉碎能力を持っていた。1978年ごろまでにこの粉碎機は住民の間に急速に広まり、1982年現在では8台に増加するにいたった。そしてこれが、タッカハラでサゴ生産を急増させることになった。加えて、たまたま内乱後に進行した移民の流入による人口増があって、サゴは商品としての位置を確保することになったのである。

サゴが商品となるとともに、タッカハラ住民の食生活は急速に米に移行していった。もっとも、とはいっても、1982年の今日においても食生活におけるサゴの位置はなお高い。人々は朝食には、揚げバナナやモチ米のおかゆにならんでバゲア (bagea; サゴのビスケット) を食べる。昼食と夕食は同じような内容だが、サゴを主食に魚をおかずに食べることが多い。この場合、サゴはダンゲ (dange; 一種の種なしパン)、カプルン (kprung; 一種

のダンゴ汁), シノレ (sinore; 炒りサゴ) に料理される。米も食べられるが、米だけが食べられることはまずない。例えば、カプルンやシノレで、もうほとんど満腹にしたあとに米を少し食べる。

人々に食事のことを聞くと、それは tallu tammassarang だという。Tallu は三つ、tammassarang は分割しえないという意味である。タバロ (tabaro; サゴ), ベテ (bete; 魚), パレ (pare; 米) はルウ人の生活にとって三つの分割しえない不可欠な主要食糧であるというのである。しかし、パロポなど、町住みの人たちにいわせると、田舎の人たちはそうはいうかもしれないが実際には米はほとんど食わず、サゴと魚だけで生活しているのだという。

I-v 商品としてのサゴ

タッカララの統計資料によると、この村の総戸数は約 500 戸。先にも述べたように、このうちの約 90% が何らかの格好でサゴ採取を行なっている。しかし、この 90% の人たちのすべてが自分のサゴ林を持っているわけではない。サゴ林保有者は住民の半分ぐらいだといわれている。こういう状況のもとで、サゴは、いわば刈分け小作的な契約のもとに生産されている。最もふつうに行われている方法は、サゴの立木の所有者は生産物の 3 分の 1 を、実際に採取作業を行なった作業者は 3 分の 2 をえるというものである。

サゴが販売される時は、ふつう仲買人の手を通じて行われる。仲買人は洗い場まで来ることが多い。この時は 3 kg 入りの 1 俵が Rp. 150 (¥ 60) ぐらいで買われる。もし、幹線道路まで運び出すと、Rp. 200 ぐらいで売買される。これがパロポの市場に出ると、もう少し高くなる。

サゴが商品になるというのは、近年この地にブギスの入植者が激増したからである。こ

の人たちは本来は米食者である。しかし、ここに入植してくると例外なくサゴを食べるようになる。誰もが最初は不味だと思いながら試してみるが、安価ということも手伝って、そのうち食事の相当の部分をサゴに頼るようになるという。こうした入植者たちは自身ではサゴ採取は全く行わないから、サゴは商品になるのである。こんなわけであるから、サゴは、ハリ・パサール (hari pasar) といわれる週 2 回の市日には、必ず出まわるのである。

これに加えて、オランダ時代からの遠隔地への輸出も、細々とではあるが続いている。主要な輸出先は東南スラウェシのクンダリ (Kendari) と南スラウェシ南端のブルクンバ (Bulukumba) 周辺である。クンダリはそれ自体がサゴ常食地であるが、最近ではブギス人入植者の激増しているところである。ルウ産のサゴはクンダリ産のサゴより上質ということで、ほぼ定期的に輸出されている。

ルウのサゴは上質だということになってはいるが、実際には品質管理が行われているわけではない。だいたいここには、品質を区別する等級というものがない。すべてのサゴは同じ等級であり、同じ値段である。少々古くなって、外側に黒っぽいかびが生えたりしても、値段はかわらない。品質管理に関してわずかに気がつけられている点といえば、俵づめの時に、しっかりと押しつけて密につめこむということだけである。万一、緩く空隙の多い状態でつめておくと、かびが内部にまわってしまっていて、全体が臭くなってしまいうということである。

サゴがこのように商品として確立し出してから、いわゆる専門のサゴ商人なるものが生まれるようになった。タッカララにはまだこの種の専門家はいないが、近辺の村々には時々いる。ベロパ (Beropa; タッカララの南約 40 km の村) のサゴ商人は、この種の商

売を最初に始めた、いわば草分けである。彼はこの商売を1973年に始めた。彼自身ブギス人であるが、彼に続いて何人かのブギスがこの商売を始めたという。

同氏の商売の方法は次の通りである。同氏は週2回開かれるベロパのハリ・パサールを商売の主舞台にしている。自分でルウ人のサゴ採取者の間をまわり、濡れサゴを集め、それをハリ・パサールに出して、ブギスとトラジャの顧客に売るのである。ここでは、タツカララの場合と違って5kg入りの俵が用いられているが、同氏はふつうRp. 300で買ってきてRp. 500で売るといふ。ふつう市日には500俵から700俵ぐらいならべて、500俵ほど売るといふ。売れ残った分はその次の市日に売る。俵入りのサゴは、そのまま放置しておいても1カ月は持つから、倉庫などなくても商売にはいっこう支障がないという。

ルウ人から集めたサゴのほかに、自分が生産したサゴも売るといふ。彼自身はサゴ林を持っていないから、立木を買うのである。成木の集中しているあたりに目をつけて、その持主から1本Rp. 3,000からRp. 4,000ぐらいで何十本かの木を買いとる。そして、それをルウの労務者と契約して、濡れサゴにさせるのである。この時の条件は次の通りである。すなわち、同氏は粉碎機を提供する。一方、ルウ労務者のほうは沈澱槽など一切の他の道具と労働力を提供する。そして、生産品は同氏3、労務者1という割合で配分するというものである。

同氏はクンダリ通いの船の船長に友人がいて、時にその船長の依頼でサゴを集めるといふ。船長のために集める時は、だいたい1回につき1,000俵だといふ。

同氏の縄張りにはベロパだが、ベロパ以外にも似たようなかたちでサゴが売られているといふ。すなわち、どこでも週2回開かれるハリ・パサールが売買の場である。同氏は、ウ

ジュンパンダン・パロポ幹線道路ぞいのハリ・パサールで売られる俵数を次のごとく推定している。場所によって、1俵の重量が異なるが、すべて5kg俵に換算している。

| | |
|------------------------|-------|
| シワ (Siwa) | 300 |
| ブリコ (Buriko) | 300 |
| ボネプティ (Boneputi) | 300 |
| バトゥロトン (Batulotong) | 300 |
| ラロンポン (Larompong) | 300 |
| スリ (Suli) | 300 |
| チンポ (Cimpo) | 300 |
| ベロパ | 500 |
| チラロン (Cilalolong) | 200 |
| パテドン (Patedong) | 200 |
| パダン・サッパ (Padang Sappa) | 200 |
| ブア (Bua) | 500 |
| パロポ | 1,000 |

パロポより北に関しては、彼は正確に俵数で言い表すだけの情報は持っていないが、上に述べたパロポ以南よりもその産額ははるかに大きいものだといふ。特にマサンバ (Masamba) の市場は相当に大きいものだといふ。

上の推定値は1982年現在のものであるが、同氏によると、この生産量は過去何年かは毎年増え続けてきたものだといふ。そして、この傾向は今後もまだ数年間は続くものと、彼は予想している。

ところで、同氏にサゴ生産が将来増大する可能性があるのかと問うと、それは難しい問題だといふ。彼によると、現在サゴは同重量の米に比べると、ちょうど半値だといふ。ルウ人生産者にいわせると、この値段が20%でもあがるようなことになれば、より馬力をかけて増産するといふ。しかし、消費者のブギスやトラジャの人たちにしてみれば、あまり高いものになるなら、いっそ米を食べたほうがよい、ということになるのだそうである。結論的にいって、同氏は、いまよりほんの少

しは単価は上昇し、その状態で生産は漸次伸びるだろうが、飛躍的發展というのは期待薄ではないかという。

ところで、生産されるサゴのうちで販売されるサゴは、どのぐらいの比率を占めるのであろうか。タッカアラの場合で試算してみると、次のようになる。例のペロパのサゴ商人によると、タッカアラ自体にはパサールはないが、この集落はパロポの市日には5kg換算で毎週約400俵を売っているという。5kg俵はふつう20人分の主食になる量だということから、これは8,000食分に当たる。1日に換算すると1,143食分である。仮に、非サゴ生産者が毎日1食分をサゴ食にしているとしてみると、これは1,143人分の1日の食糧ということになる。すなわち、人口約2,300人のタッカアラは自らが消費するサゴとは別に、1,143人の購買者にサゴを供給していることになる。先にあげた幹線道路ぞいの市場近くの集落は、いずれも、その生産したサゴをだいたい似たような比率で販売にまわしていると考えてみてもよいのではなかろうか。

幹線道路にそわない集落はどうした状況になっているのであろうか。例えばタッカアラに隣接するデサ・マワ(図1参照)をとってみると、次のような状況である。ここは例のウジュンパンダン・パロポ幹線道路より2-3km離れているのだが、サゴはもう商品としての意味はない。この集落にもサゴがあって、人々はサゴもかなり食べている。しかし、販売は全くしない。理由は、ここはすでに幹線から遠く、サゴを肩で運搬して幹線道路まで出してまで売りに出す気はないというのである。

このマワがサゴの販売に熱心でないのは、ほかにもっと重要な理由がある。それは、この山に近い集落は最近では山腹に大々的に丁子を植えているからである。このことのために実際には労働力が不足しているのである。

丁子は一旦出荷が始まると、サゴなどよりはるかに高価な品物であるから、運賃は問題にならない。

さらにもっと別の理由もある。ソンカ扇状地の扇頂に近いこのマワでは、昔から水田がかなり重要視されていたようである。確証はないが、インフォーマントのB氏の4代前のパチョの水田を耕した山の民というのは、この人たちのことのようにもある。彼らは昔からタトル(トラジャ)の山地と結びつきが強く、水田耕作は彼らの文化の一部でもあったようである。そのことはいまでも認められて、例えば、このマワまで来ると、ソンカ川の分流にはいくつかの簡単な井堰がかけられて灌漑稲作が行われている。こんなことはタッカアラではついぞみかけないことである。要するに、こうして、少し山地にかかると、完全なサゴ食圏というよりは、稲をも作り、なおサゴをも食べるという一種の混食圏になってくる。そして、そういうところには、最近では山に近いという環境を活かして丁子栽培が伸びているのである。

タッカアラの人たちは水稻の話になると決まって、マワではよい米がとれるけれども、自分のところは駄目だという。なぜなら、上流のマワで養分が全部吸いとられて、タッカアラに来ると精気のない水になってしまっているからだという。また、マワには山があって丁子で金儲けができるが、ここには山がないのでそれはできないという。そのかわり、幸い、幹線道路に面しているから、パロポなどへの出稼ぎはできるのだという。したがって、とりあえずは、このサゴと出稼ぎを中心に置くのだという。タッカアラの人たちのこの言い分は、タッカアラの現況を的確に表現しているように見える。幹線道路ぞいにはタッカアラのような集落が点々と続くのである。

II ペンカジョアンのサゴ生産

II-i 地理的背景

ペンカジョアンは図1に示したように、大きなルウ低地の海岸部に位置している。まわりには広い平坦地が続き、山は望みみることもできない。これは小さな扇状地上のタッカララとはおよそ異なった環境である。

ルウ低地はマサンバを頂点にほぼ半円形をしている。円周の外側を山がとり囲み、直径部が海岸にあたっている。直径をなす海岸線は約60kmである。このルウ低地は一見ひとつのデルタのようにみえるかもしれないが、実際にはそうではない。周辺の山地から多くの河川が流入して作った、一種の氾濫原群である。流入河川は大きいものだけでも西からポンペンガン (Pompeangan) 川、ロンコン (Rongkong) 川、クボ (Kebo) 川、バレアセ (Balease) 川などがある。これらの川は山を出たとたん扇状地を形成し、山から離れると自然堤防と後背湿地の組合せからなる氾濫原を作る。低地の主要部はこの氾濫原群からなる。そして、これらの氾濫原は海に近づくと海岸のマングローブに漸移する。マングローブは図1にも示されたように、数kmから5-6kmの幅がある。ルウ低地はしたがって大きくは三つの部分からなる。周辺部に発達する扇状地群と、中央部を構成する氾濫原複合と、海岸ぞいのマングローブである。

これらの三つの部分はそれぞれに特有な景観を持っている。扇状地群地区は、図1からも窺い知ることができるように、このあたりにおける人口集中地区である。水利のよいところには水田がみられ、サゴもみられる。集落は多くは年おいた深い果樹の屋敷林で覆われ、そのありさまはタッカララのそれに酷似している。事実、これは、タッカララからパ

ロポにいたり、さらにパロポ・ウォトゥ幹線道路ぞいに、サッバン (Sabbang)、マサンバ、ボネ・ボネ (Bone Bone) と続いてゆく山麓扇状地帯である。

ルウ低地中央部の氾濫原複合は一種の未開発地区である。しかし、深い原生林地区かという、そうではない。かつて焼畑か何かで広くもとの森が破壊されてしまったらしく、大部分のところが二次林で覆われている。その中で最も卓越するものは背丈十数mに伸びるバンチェである。そのほかにはパンダナスや籐も多い。ところによってはバンチェがなく、そのかわりシダ類と灌木の混合が広く広がる。半湿性の環境で、いわゆるラワ・ラワと呼ばれるところである。こうした中に、ごく稀に点在する小さな集落のまわりには、焼畑のトウモロコシ、オカボ、キャッサバなどの畑がある。低位のよりラワ・ラワ的などところには、いわゆる焼畑水田がみられる。これはラワ・ラワ林を焼き払い、穿孔して点播するものだが、雨季になると湛水して、点播した稲は一見水稻様に育つという稲である。このように、この地区は全体的には粗放な土地利用で、まだ焼畑が卓越している地区とみてよい。この地区にはサゴはほとんどない。むしろ自生のアレンが点在している。

このルウ低地で、いまひとつの人口集中地区は、上記の氾濫原とマングローブの接触部である。ここにはしばしば陸封された砂州もしくは自然堤防が走っている。これらは時に500-600mの幅を持ち、周辺より1.5mぐらい高い。きれいな白砂できていることがある。こうしたところによく集落が立地する。そして、この種の集落の周辺には、しばしば広大なサゴ林がみられる。ここで述べようとするペンカジョアンは、こうしたマングローブ背後の集落のひとつである。

ペンカジョアンの詳細は図4に示してある。ここに示したものは、デサ・ペンカジョ

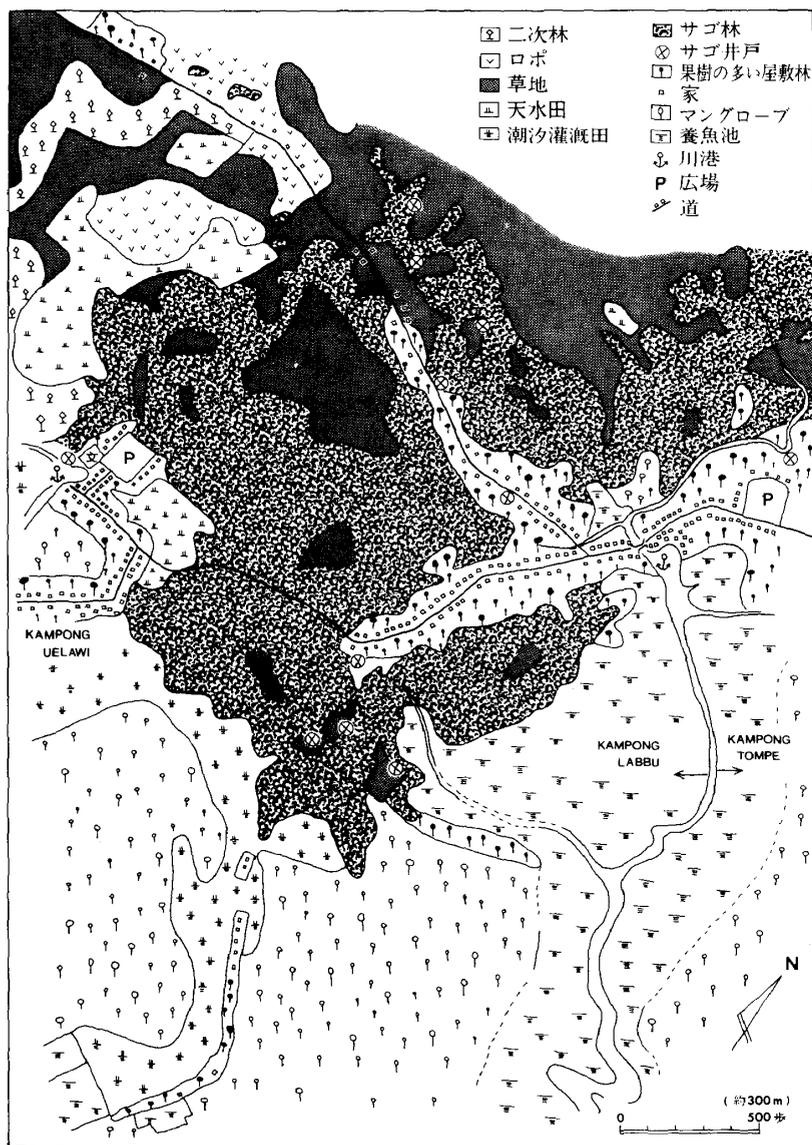


図4 ペンカジョアンの土地利用

アンのうちのカンボン・ラップ (Labbu) と、それに東接するカンボン・トンペ (Tompe), ならびに西接するカンボン・ウエラウィ (Uelawi) の、それぞれ一部ずつである。これらの集落の中心であり、また玄関口にあたる場所は、感潮河川を海から約4km入りこんだ川港である。これらは同図中には錨の印で示してある。ここまでは満潮時なら7-8tonのアウト・リッターで溯航して行くことができる。集落と集落を結ぶ交通路としては、

このほかに貧弱な道がある。この道は乾季なら少し内陸に迂回して単車でパロポへの連絡を可能にしている。しかし、人々がパロポ行きにこの道を利用することは皆無といってよい。人々はみな舟を利用する。

図4には、二次林、ロポ (lopo), 草地、天水田、潮汐灌漑田、サゴ林、果樹の多い屋敷地、マングローブ、養魚池が示してある。簡単にこれらについて説明すると、以下の通りである。

① 二次林

例のラワ・ラワそのものである。前記のバンチェ、パンダナス、籐などのほかに、ところどころにサリサリンと呼ばれる幹の白い背の高い木が立っている。これは丸木舟を作るのに重要な木だという。稀にアレン (砂糖ヤシ) がある。

② ロポ

焼畑跡の二次林である。図4に示されたものは、1976年から1978年までの3カ年耕作されたが、その後放置されたものである。多くはバンチェであるが、直径30-40cmの切株からはさかんに傍芽が出ていて、いまは樹高5-6mのバンチェの一斉林になっている。

③ 草地

かつては水田として使われていたが、最近の少なくとも10年は水牛の放牧地として利用されていたものである。パラ・パラ (pala

pala; チカラシバ) が水牛に食われて地面にへばりつくようにして生えている。多くは、カハル・ムサッカルの内乱時、ここに立てこもった内乱軍の兵士たちが開田し、7-8年はかなりていねいに水田として使っていたところだという。いわゆる焼畑水田と違って、この場合は抜根し耕起して使用していたから、水田放棄後もここには森は復元していない。

④ 天水田

例年植え付ける水田である。嚴重に柵で囲まれている。1982年にはしかし、1筆も植付けが行われなかった。何十年ぶりかの天候不順で雨がなく、植付け水がえられなかったからである。

⑤ 潮汐灌漑田

潮汐作用の及んでいる水田で、いわゆるサワ・パッサン・スルツ (sawah pasang surut) といわれているものである。ふつうは雨季に塩水が薄められた時期に植付けを行う。1950年代後半に開田された。それ以前はマングローブであった。1982年度は天水田同様、天候不順で植え付けされなかった。

⑥ サゴ林

のちに詳述。

⑦ 果樹の多い屋敷地

多くみられるものは、ココヤシ、マンゴー、ドリアン、バナナなどである。ほかにランサット、ジャック・フルーツ、パンノキ、ジャンプー・アイル、ビリンビン、サラックなどがある。各屋敷はふつう空濠を掘り、さらにその内側にサゴの葉柄製の柵を作って、野豚や水牛が入りこまないようにしている。

⑧ マングローブ

最も卓越する樹種はテッコ (tekko) とバンコ (banko)——ともに *Rhizophora sp.*——である。すらりと伸びた木が比較的密につつま立っている。感潮クレークぞいにはニッパがよくみられる。波打ち際にはベロバが卓越する。こうしたマングローブ中には、ところど

ころに土手が築いてあって、養魚池への転換の途中のものがある。

⑨ 養魚池

以前はマングローブであったところに土手(高さ1.5 m, 上盤幅2 m, 底幅3 mが規格として奨励されている)と水門を築き、1区画1 ha前後の養魚池としたものである。マングローブは伐採、抜根し、ふつうは水深を深めるためにさらに掘削している。主として、ボロ (bolo; *Chanos chanos*) が飼われている。

以上が図4に現れたものであるが、デサ・ペンカジョアンの統計は次のような数値を与えている。

| | |
|------------|----------------------|
| a) デサ総面積 | 約100 km ² |
| b) 利用別面積 | |
| 養魚池 | 700 ha |
| 園地 (屋敷林など) | 119 |
| 水田 | 249 |
| c) 植物 | |
| サゴ | 733 株 |
| ココヤシ | 3,840 本 |
| マンゴー | 70 |
| ドリアン | 40 |
| d) 動物 | |
| 水牛 | 200 頭 |
| 牛 | 0 |
| 山羊 | 50 |
| 鶏 | 2,420 羽 |
| アヒル | 565 |
| e) 職業 | |
| 農業 | 362 戸 |
| 漁業 | 53 |
| 林業 | 20 |
| 商業・工業 | 21 |
| その他 | 28 |
| 計 | 484 戸 |

ここで注意しておかなければならないことは、ペンカジョアン (484 戸, 2,994 人) は

タッカララ (512戸, 2,297人) とほとんど同じ規模の人口しかないのに対して, その村総面積は, タッカララの 9 km² に対して, 100 km² と実に11倍の巨大なものを持っているということである。ペンカジョアンの人口密度は km² あたり30人と, 稀薄であることを知っておかなければならない。

上の統計をみる上で, もうひとつ注意しなければならないことは, 上の数値が必ずしも現存する実数を示しているものではないということである。これは基本的には徴税の対象となっているものの数字であるにすぎない。例えば, 植物の数など実際にはこれの何十倍もある。水牛にしたところで同じである。逆に, 養魚池は現在ではまだこれほど多くは実在していない。将来は実際に養魚池になるはずだが, いまはそうではない, しかし, もういまからすでに登録だけは養魚池としておこうというマングローブ地も含まれている。水田なども実際には長年耕作されずに草地化しているものも含まれている。

そういう観点からすると, サゴはひどく過小評価されている。図4からも想像されるように, 実際には数万株, あるいは十数万株あろうかと思われるサゴが, ここには733株しか示されていない。余談になるが, それでもサゴがこうした公式の統計に表れてくるというのは慶賀すべきことである。ふつうはタッカララの場合のように, たとえ多量に存在していても記帳されない。この植物は中央の人たちには自生する雑草ぐらいにしか考えられていないようである。その意味ではペンカジョアンのこの統計には, さすがにスラウェシ第1のサゴ村だけのことはあるとうなずかされる。

II-ii 生態

確固たる証拠はないのだが, 地元の人たちは, サゴはここではいつの時代にか外部から

導入された外来植物であると信じている。このことは, 図4にみられるサゴの分布からも妥当なことのようと思われる。もし自生だとすると, ルウ低地の中央部の氾濫原地帯に, もっと広い自然分布があってもよさそうである。先にも述べたごとく, 実際には中央部にはサゴはない。そういうところに時たま生えているサゴをみると, 地元の人たちはそれはカハル・ムサッカルの軍隊が植えたものだという。

微視的にみても, サゴの分布はここでははっきりとした規則性を持っている。まず第1にサゴはマングローブ帯には侵入していない。しばしばマングローブに接してサゴの立っていることがあるが, よくみると, 両者の地盤にははっきりとした違いがある。マングローブは干潟部を占居しているが, サゴはそれより少なくとも 50-60 cm は高い砂州の上に生えている。もっともしかし, 砂州の上でも, マングローブにあまりに近いところにはサゴのないのがふつうである。土地の人にいわせると, そういうところでも生理的にはサゴは十分耐えられる。しかし, 処理用の淡水がえられないから, ふつうはそういうところには植えないのである。

サゴはしたがって, 本来は淡水域の氾濫原のものである。ところが, この氾濫原の中でもまたその分布域ははっきりと決まっている。比高 0.5-1.5 m ぐらいで, 緩い起伏を繰り返す微地形の中でサゴは高位部のみを占めている。低位部は, 二次林として残されているか, 水田になっているのである。このことに関して, 土地の人は次のような説明をしている。すなわち, 最初人々がこの海岸低地に住みついた時, 彼らは選択的に高燥地に居を構え, その周辺の比較的水はけのよいところにサゴを植えた。低位部は雨季には洪水の流れることが常だったし, ワニなどもいて, けっして利用し易いようなところではなかったからだ

というのである。こうして、高燥地中心の土地利用が長く続いたが、その後になって水稻が導入されるようになると、高燥地はすでにサゴに利用されていたから、水田は低位に開かざるをえないことになった。しかし、このことは水田水利にとっては結果的にはよかった、なぜならサゴ林から流出してくる水が水田に使えたからだというのである。かくして、現在、最後に空地として残されているところは集落の周辺に関する限り最も低いところだということである。

以上が土地の人たちのサゴ立地に対する認識である。サゴ林内の土壤の湿り程度は、実際タッカラの場合よりもさらに一段と少なく、多くのところで地表はむしろ乾きあがっているという感じさえする。このサゴ林内には、時に数 m^2 から $100 m^2$ を超す草地が点在するが、そういうところで最も多くみるのはチカラシバ (*Andropogon aciculatus*) である。場所によっては、ノボタン (*Melastoma affine*) とアラン・アラン (*Imperata cylindrica*) が叢生している。これらはいずれも、そこが年中、どちらかという乾いていることを指示しているように思える。

土壤に関しては、土地の人は砂質粘土もしくは粘土質砂がサゴにとって最もよいものだと考えている。サゴ林内で最も代表的だと教えられた地点での土壤断面は、次の通りである。

地表-0.1 m：褐灰色粘土。多くのところにサゴ遺体の破片を混ざる

0.1-0.17 m：灰色と浅黄色の混じたシルト質粘土

0.17-0.4 m：にぶい黄橙色の砂質シルト

0.4-0.8 m：灰黄色のシルト質細砂。黒褐色のサゴの根があり、その周辺のみ青味がかかったグライのリングができています

もっと粘土分の多い場所もあるが、泥炭質粘土だとか泥炭といったものは皆無である。

ルウ低地には、そういった本来の意味での低湿地の地層はほとんど存在しないようである。

サゴはふつうはもう少し粘土質で多湿などころのほうがよりよく育つのではないかと問うと、土地の人たちは頑強に否定する。彼らにいわせると、低湿地のサゴは水分が多くてよくないというのである。昔、サンベで髓をけずり出していたころ、作業中、からだか飛び散る水でズブ濡れになるようなことが時にあった。また、もっとひどい時には、けずり出したとたんに水で流れ去るようなサゴがあった。そういうものは湿地のサゴだったという。また、ヨーロッパ人の報告に対しては、それは彼らの恣意的な偽宣伝だという。彼らは高燥なよい土地を、自分たちが必要とするゴムや野菜や果物を植えるためにとっておく必要があったので、サゴをわざわざ湿地に追い落とす虚偽の理論を作ったのだという。ここでは人々は頑として、サゴはむしろ高燥地のものだと言い張る。

ペンカジョアンのサゴ林はひとつの景観的な特徴を持っている。それは林の縁辺がしばしば草地に漸移するということである。サゴ林の中央部では、サゴの株間間隙は比較的小さい。しかし、周辺部にいたると多くの草地を間に挟み、株間が広くなり、やがて隣接する草地に漸移する。こうしたところでは株間はしばしば 10-20 m に広がり、その下は短い草が全面を敷きつめ、まるで公園のような景観になる。こうした公園的景観の中で何十頭という水牛が草を食むのは、ここではよくみる風景である。

こうした状態で育つサゴは、10年経つと収穫が可能になるという。しかし、ふつうは12年ぐらいしたものを切り倒すのが一番多いようである。花の咲いているサゴをみることは皆無であるが、15年ぐらい経つと花が咲くのだという。

II-iii 精製

サゴの髓を粉碎し、水洗して、沈澱槽で沈澱させるという基本的工程は、ペンカジョアンの場合もタッカラの場合と同様である。しかし、実際の作業方法となると両者の間には差異点もある。差異点の最大のもの、ペンカジョアンでは、井戸を持ち定置した工場を持ってサゴを洗っていることである。以下、作業工程ごとに順をおって、簡単にその仕事内容を記してみる。

- ① まず木を切り倒す (mattubang)。これは斧で行い、チェーン・ソーは全く使用しない。ひとりで5分ぐらいで完了する。
- ② 倒した木から葉柄を切り落とす。山刀で行う。ふたりがかりで15分かかかる。
- ③ 倒木を大人が両手を広げた長さの丸太状のポロ・ポロ (polo polo) に切り分ける。これには、長さ 120 cm ぐらいの手びきののこぎりを用いる。非常に短いものだと5本

の、長いものだと10本のポロ・ポロがえられる。1本のポロ・ポロを作るのに約5分かかかる。

④ 樹皮を斧ではぎとる (makkunisi)。約 160 cm 長さの1本のポロ・ポロの皮をはぐのに、ひとりで10分かかかる。

⑤ 皮がとれ髓だけになった丸太を、より短い4本の丸太に切断する (makpolopolo)。これには上記ののこぎりを用いる。1本のポロ・ポロを切り分けるのに、ひとりで5分かかかる。

⑥ 約40 cm の長さになった髓を薪状に割る (mappue)。これには斧を用いる。時間はほとんどかからない。

⑦ 割った薪状の髓を工場 (bola bola fabrik) に運ぶ。ふつう籐の極めて簡単なベルトをかけて、天秤で運ぶ。200 m ぐらいの距離だと、この方法で運んでしまうが、それ以上になると自転車で運ぶ。荷台に乗せること

もあるが、ふつうは荷台の両側に大きな籠をくくりつけて、その中に入れて運ぶ。これは本来魚運搬用の籠である。運搬に要する時間は距離によって異なるが、ふつうは立木1本分を運搬するのに、ひとりで1日近くかかる。サゴ生産中最も嫌われる工程のひとつである。

ペンカジョアンの作業はタッカラのそれに比べると、この髓の運搬あたりから異なってくる。すなわち、タッカラでふつうに行われているように、長さ 1 m ぐらいの丸太をサゴ・レールの上を転がして洗い場に運ぶというような方法は、ここではほとんど用いない。洗い場には脱皮した髓だけを持ってくるのである。この工場と呼ばれる洗い場には、ふつう1台の粉碎機と二つの井戸がセットにしてある。もちろん沈澱槽とトユがある。そのあ

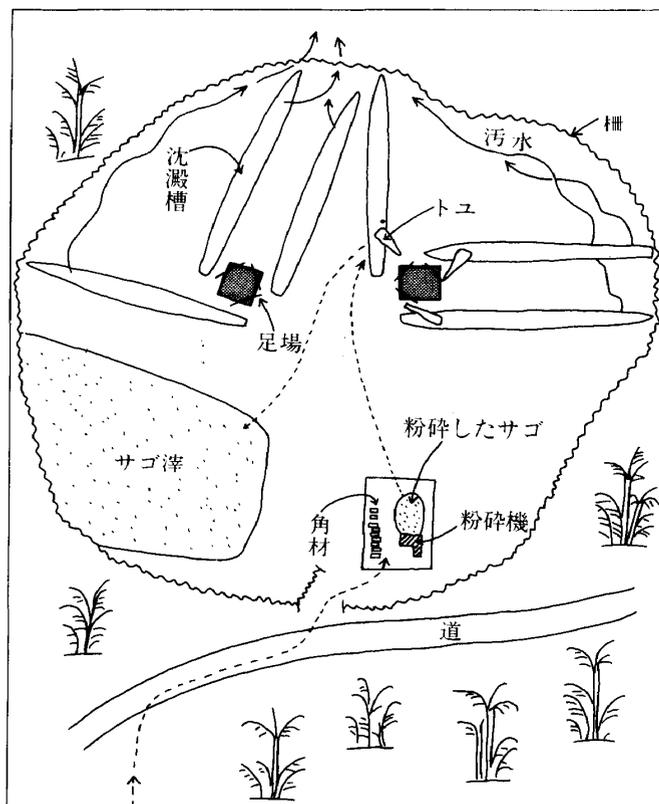


図5 典型的なサゴ工場

りさまは図5に示したようなものである。

井戸はたいてい2m四方の断面で、3mの深さを持っている。井戸には厚手の板の内張りがしてあって頑丈である。この内張りの裏側にはシュロに似たアレンの繊維が埋めこんであって、これが濾過層の役目を果たしている。雨季には井戸はその口まで水があるが、乾季にはその水位は2.5mぐらいにまで下がってしまうものが多い。時には干あがってしまうものもある。井戸の上には足場用に厚い板が三隅に1枚ずつ、計3枚渡してあって、作業する人はこの上に乗り、足下の井戸からバケツ (sero) で揚水してサゴを洗うことになっている。

この工場では、タッカララの洗い場と異なるいまひとつのものは、その沈澱槽である。これはタッカララの場合のようにサゴの幹をくりぬいて作ったものではない。木製の丸木舟である。ふつう10mぐらいの長さがある。これは近在の漁民から古い舟を買ってきて使うのである。1艘、3-4万ルピアするが、一度買うと10年は使用可能という。こうした古舟の沈澱槽が井戸にその一端を接するようなかたちで配置してある。

もっともしかし、このペンカジョアンの工場がタッカララの洗い場と何よりも異なる点は、その乾いた地盤と明るいまわりのたたずまいである。これは、あのタッカララの薄暗くてじめじめした環境とは、おおいに異なる。そして、ここはタッカララの場合と違って、嚴重に柵で囲われていて、まさに立派な工場である。徘徊する水牛や野豚が夜中に工場内に入ってきて、沈澱槽のサゴや、積んである髓を食い荒らすことを防ぐために、柵が作ってあるのである。

⑧ さて、工場に運んでこられた角材形の髓は粉碎機にかけられる。160cm分の丸太1本分がひとりで15分、したがって、根元から先端まで木1本分を処理しようとする

時間半から2時間ぐらいかかる。

⑨ 粉碎したオガクズ状のサゴは、2斗ほど入るバケツ (basong) に入れて、天秤で洗滌のためのトユのところまで運ぶ。バケツはサゴの葉柄で作った頑丈なものである。

⑩ トユでは、その先端についた袋に、バケツ半杯分のサラエンを入れて洗う。洗滌には井戸から7l入りの水汲みバケツで、水を汲みあげてはもみ、また水を汲んではもむということを25回から30回くらい繰り返す。2分の1バソンを洗うのにひとりで15分かかかる。したがって、一荷のオガクズ状サゴを処理するのに1時間かかる。

1日中、こんをつめて洗い続けると14バソンぐらい洗えるわけだが、ふつうはそうはゆかない。その日の朝倒して運んできた1本の木を、三つのトユを使って1日で処理するというのがふつうである。

⑪ 10日間ほど洗い続けると、沈澱槽がサゴでいっぱいになる。そうすると、これを俵 (balaba または tumang) につめる。沈澱槽の丸木舟1艘には、ふつうのサイズだと、5kg入りの俵300個を作りうるだけの量が溜る。この一舟分の俵づめは、3人ないしは4人で1日の仕事である。ちなみに、このニッパ製の俵そのものは、これを専門に作る人がいて、その人から1個 Rp. 15 ぐらいで買う。

以上がペンカジョアンのサゴ精製工程である。井戸の最大の利点は、乾季になって、たとえ川水が枯れるようなことがあっても、通年の稼行が可能だという点である。タッカララでは川の水が枯れると、そのまま作業を中断する。もっとも、ペンカジョアンの井戸も、そのすべてが通年十分に活用するというわけではない。図4に示したカンボン・ラップの場合、30ある井戸のうち(井戸地点は図4では⊗印で示してある。ひとつの⊗印にはふつう2個の井戸がある。時に4個あることもある。残念ながら、30の井戸のすべて

を图示しているわけではない) 18個のみが通年使用可能で、残りの12個は本当に晴天が続くと干あがってしまう。彼らにいわせると、こうした井戸は彼らの祖父のころ、すなわちいまから50ないし60年前にはもうさかんに用いられていたという。

II-iv 生産量など

サゴ採取の社会・経済的側面はそれほど簡単なものではない。なぜなら、それは自給的な生産というものではなく、それにサゴ林を保有する者と、それを保有しない者が入り交じっているからである。さらに、サゴ林を保有している者でも、それが小地片で分散している場合は、むしろ遠隔地のものを他人に採取させ、自分は自分により都合のよい他人の林のサゴを切るといったことが起こってくるからである。サゴ採取が数人の共同作業であることも、事態を複雑にしている。

生産品の配分の全容を知ることは私にはとうていできることではないが、たまたま、それに関して聞いたケースが2例あるので、それをここに紹介する。

第1の例は、工場を所有する比較的裕福な人の例である。彼は井戸、粉碎機、トユ、沈澱槽、すなわち設備一式を持っていて、他人にその設備を使用させサゴをとっている。彼の施設を使って実際にサゴ精製を行うのは、6人の作業員である。この場合、彼自身の所有にかかる木を用いる場合が多いが、彼が他人からサゴの木を現金で買ってきて用いることもある。要するに、彼は施設一切と原木を提供して、作業員を働かせているわけである。さて、こういう条件で生産されたサゴは、次のように配分される。まず、彼はサゴの原木の提供者として生産品の5分の1、別に施設の提供者として、さらに5分の1、計5分の2を受けとる。残りの5分の3を、そこで働いた作業員たちが受けとる。彼による

と原木のサゴは Rp. 3,000 から Rp. 4,000 するという。

第2の例は、別の工場の一作業員が話してくれたものである。彼の場合、仲間とともに6人で組を作って、他人の工場で働いている。ひとは機械を動かして粉碎をする。ふたりが立木を切り倒し、皮をはぎ、角材状にし、工場まで運んでくる。そして、残りの3人が洗滌をする。これが6人の行う一種の作業分担である。この場合、生産されたサゴは、120俵を単位として、次のように分配されている。

| | |
|----------|------|
| 立木の提供者 | 20俵 |
| 機械の持主 | 10 |
| 井戸の持主 | 3 |
| 洗滌用トユの持主 | 3 |
| 沈澱槽の持主 | 3 |
| 斧の提供者 | 3 |
| 労働の提供者 | 78 |
| 計 | 120俵 |

この場合、労働の提供者は6人だから、作業員ひとりのとり分は13俵になるという。

デサ・ペンカジョアンの中でも、カンボン・ラップは最も中心的なサゴ生産地である。このカンボン・ラップのサゴ生産量を、その区長に計算してもらったのが、次のものである。彼は計算の基礎になる情報として、次のものをあげている。

- ① このカンボンには30個の井戸がある。そのうちの18個は通年使用可能であるが、残りの12個は乾季の3カ月間は使用不可能である。
- ② ふつう、ひとつの井戸には沈澱槽は三つ据えられている。しかし、これらの三つの沈澱槽のすべてが常時使用されているとは限らない。現在の実績からすると、平均して二つが常時使われていると考えてよい。言いかえれば、雨季の間は60個の沈澱槽が、そして乾季には36個の沈澱槽が稼動

していると考えてよい。

③ ひとつの沈澱槽は、満杯になると 5 kg 入りのサゴ俵、300 俵を生産しうる。

④ ふつうに稼行している場合、ひとつの沈澱槽は15日間で満杯にすることができる。言いかえれば、1 個の沈澱槽は1カ月には、300俵分を2回生産する。

以上の情報をもとにして生産量を算出してみると、次のようになる。すなわち、

⑤ 雨季の9カ月間には、その生産量は
 $60\text{槽} \times 300\text{俵} \times 5\text{kg} \times 2\text{回} \times 9\text{カ月}$
 $= 1,620\text{ ton}$

⑥ 乾季の3カ月間には、その生産量は
 $36\text{槽} \times 300\text{俵} \times 5\text{kg} \times 2\text{回} \times 3\text{カ月}$
 $= 324\text{ ton}$

⑦ したがって、年生産量は
 $1,620\text{ ton} + 324\text{ ton} = 1,944\text{ ton}$

すなわち、カンボン・ラップでは現在、年間 1,944 ton の濡れサゴを生産していることになる。

デサ・ペンカジョアンの他の三つのカンボンについても、同氏にその生産量を聞くと、同氏は次のような計算をした。すなわち、もし、カンボン・ラップの年生産量を 100 とすると、ウェラウィ、トンペ、それにパナサイ (Panasai) の三つのカンボンの年生産量はそれぞれ、30, 12, 10と推定することができるという。すなわち、三つのカンボンの生産量はそれぞれに、583.2 ton, 233.3 ton, 194.4 ton ということになる。結局、デサ・ペンカジョアンでは、カンボン・ラップを含めて全部で 2,955 ton の年生産量があるということになる。

ペンカジョアンにおけるサゴの位置を考えてみるために、タッカララの場合との比較を行なってみたい。その前に、まずペンカジョアンでの自家消費量を推定してみると、次のようになる。仮にデサの人たちが毎日2食をサゴでまかなっていると仮定すると、ひとり1

年間の消費量は $1/20\text{俵} \times 2\text{回} \times 365\text{日} = 36.5$ 俵となる。すなわち約 180 kg である。これは 5 kg 入りの俵1俵は20食分にあたるという一般の考えにしたがっている。デサ・ペンカジョアンの全人口は2,994人であるから、デサ全体での消費量は $180\text{kg} \times 2,994\text{人} = 540\text{ ton}$ ということになる。すなわち、ペンカジョアンでは年間生産量 2,955 ton, うち自家消費量 540 ton, 販売量 2,415 ton ということになる。

一方、タッカララでは週2回のハリ・パサールに200俵 (5 kg 俵に換算して) のサゴを出すという。1年を50週として計算してみると、その年間の販売量は、 $5\text{kg} \times 俵200 \times 50\text{週} \times 2\text{回} = 100\text{ ton}$ となる。すなわち、タッカララでは年間 100 ton を販売している。

上の二つの数字を比較してみると、ペンカジョアンとタッカララのサゴの生産の意味が非常にはっきりしてくる。前者の 2,415 ton という販売量は、後者の 100 ton という販売量に比べると、24倍の大きさを持っていることになる。また、前にも検討したように、タッカララの場合は販売量は自家消費量よりはるかに少なかった。しかし、ペンカジョアンの場合は違う。販売量は自家消費量の4倍に達している。ペンカジョアンはまさに典型的なサゴ村ということがいえる。

ペンカジョアンがこのように大きな輸出量を持つようになったのは、しかし、それほど古いことではない。それは1978年ごろからで、粉碎機が普及し出してからである。それまでは手動のバルトしかなく、粉碎がネックになって産額は限られていた。そもそも、このエンジンで回転する粉碎機というのは、この付近ではトッケ (Tokke) で、1977年に初めて使い出されたものである。最初はコプラをけずるための機械であったが、コプラの仕事のない時にサゴに転用されてみて、成績良好ということで、その後急速にサゴ専用の粉碎

機として伸び出したのである。

極めて多量に生産されるサゴは、地元の仲買人の手で多くはパロポに、一部はジェネポントやクンダリに輸出されるという。地元では5kg 俵がふつう Rp. 250 だが、それがパロポまで運ばれると Rp. 350 になるという。デサ・ペンカジョアンには現在、15人の仲買人がいるという。

II-v 生活の中のサゴ

かくして、サゴはペンカジョアンではまだ極めて重要である。しかし、ここでも米は皆無というわけではない。村の統計が示すごとく、ここには水田がある。しかし、村人にいわせると、やはりサゴが圧倒的中心だという。なぜなら、水田は統計上はあることになっているが、あまり作らないからだという。こうした水田というのも、もとはといえばオランダ時代に命令で開いたもので、しかもそれらの多くは貴族に属していて、平民はいわばそれを強制的に作らされていたものだという。独立後は、もうそういう時代でもないから、水田はすたれてゆくのだというのである。

オランダ時代を知っている老人によると、1920年代のペンカジョアンの人口は、現在の3分の1ぐらいの感じだったという。トンペやラブやウェラウィも、当時は図4に示すように人家は密集しておらず、各戸は、ほぼ50mの間隔をおいて、旧道ぞいに点在していただけだという。同氏が旧道というのは、ウェラウィの川港とトンペの川港を結ぶ村内道路のことである。集落の北西部の水田地帯へ伸びてゆく道は、戦後カハル・ムサッカルの軍隊が新しく作ったもので、これは昔はなかったものである。1920年代時点では、トンペとラブの人たちはその半分がサゴ採取者、残りの半分が漁民であったという。水田はほんの少しだけあった。ウェラウィは全村これ完全にサゴ採取者のみからなる集落だっ

たという。

もっとも、サゴ採取と漁業だけしかない村といっても、けっして自給的なものではなかったらしい。ブギスの商人が時おりやってきて、サゴと籐とを持っていった。一時はココヤシもかなり売れた。ココヤシはコプラにはしないで殻のまま売り渡した。それとは別に、月に1度ぐらいは自分たちでもパロポにサゴを売りにいった。生活必需品の購入のためである。それに時々パロポのダトゥの命令で港や道路の修理などにかり出されることもあった。村はこうして、ある程度外部との交渉を持っていた。

現金収入という側面では、何といっても一番大きな意味を持っていたのは水牛であった。多くの人は10頭ぐらいの水牛を持っていたが、そのうちの2-3頭を売ったのである。4人ぐらいが組を作り、10頭ぐらいをまとめて、ランテパオ (Rantepao; トラジャ山地の主邑) に売りにいった。行き帰り約2週間の旅であった。毎年2回ずつぐらい、こういう水牛売りの旅に出た。いまでもそうだが、当時は水牛はただラワ・ラワに放しておくだけだったから、これを生業といえるかどうかは問題だが、現金収入という点では圧倒的に重要であった。当時、ブギスのサロンが1枚50セントのころ、水牛はペンカジョアンでも Rp. 10、ランテパオに持ってゆくと Rp. 15 で売れた。

第2次世界大戦まではだいたいこういうふうに、サゴと魚と水牛が生活の中心であった。しかし、日本軍が入ってくると、事情が少しかわった。日本軍は稲作を重視し、人々が水田で働くことを強く奨励した。その結果、この時期には稲の比重がうんと高くなった。しかし、サゴの増産も奨励された。この時、既存のサゴ林の周縁に新たに増植されたものも少なからずあった。

ペンカジョアンにとって最大の変化は、

1955年から約10年間のカハル・ムサッカルによる内乱時代に起こっている。ペンカジョアンだけでなく、広くクチャマタン・マランケ全体がこの時、一種の解放区になった。こういう状態であったので、親カハル派の人たちの多くがここに集まってきた。他地方での内乱軍の情勢がおもわしくなくなると、内乱軍側の人たちはますます多くここに集まるようになった。かくしてここは一時、異常な流入人口をかかえることになる。ラワ・ラワはこの時、大々的に開墾されることになるのである。先に老人が述べた、北西に伸びる新道というのは、この時カハル軍によって建設された道路である。そして、新道路にそったラワ・ラワは、広く水田にかえられたのである。図4に示された水田や草地というのは、そのほとんどが、この時に開かれたものである。

この時のラワ・ラワの開墾は、地元のルウ人の伝統的発想を絶するものであった。ラワ・ラワの木は徹底的に抜根され、整地されて、水田が作り出された。これは、林を粗雑に切り倒し、倒木の株間にサゴを挿し植えするという、彼らの固有の農法とはおよそ違うものであった。

カハル・ムサッカル時代に開田された水田の多くは、内乱が終り人々の去ったあとは、再び放棄されることになった。しかし、それはもう昔のラワ・ラワ林には返らないで、草地として残ることになった。パンチェは抜根されてしまっていたからである。ペンカジョアンの草地や水田というのは、基本的にはこうした外部からの働きかけによって、極めて異常な状態のもとで作られたものである。これは、いわば伝統的なペンカジョアンの景観とは無縁のものであるといわねばならない。

土地の人たちにいわせると、本来のペンカジョアンというのは完全な森の国であるという。森でサゴをとり、背後のラワ・ラワに水牛を放し飼いし、海岸に出て魚をとったとい

うのである。そして、いまもこのことは基本的にはかわらないという。

水牛放牧はサゴとは特に密接に結びついている。ある意味では水牛を大切にしすぎるから稲作を敬遠せざるをえなくなり、それがサゴへの依存度をますます高めることになっているのである。この間の事情はこうである。ペンカジョアンでは、もし稲を作ろうとすると、稲田は柵で嚴重に囲いこまねばならない。そうしなければ、水牛に荒らされて、稲が全滅するからである。実際には水牛以外に野豚も多いから、本当に完全に稲田を守ろうとすれば、耕地は柵と空濠でとり囲まねばならない。実際、屋敷地の場合、ペンカジョアンではそのすべてが、幅、深さともに1mぐらいの濠と柵で囲われている。戦前は貴族や名門の金持ちは、こういう方法で田を守り、耕作を続けてきたのである。つい2、3年前にも、再び水田を、という声があがり、一度柵なしで耕作してみようという相談がまとまり、それを実行したことがある。しかし、結果はみごとに失敗してしまった。案の定、動物にやられたのである。

ペンカジョアンにおける耕作軽視は徹底している。比較的簡単に作れる野菜さえあまり作らない。例えば、私の滞在中食卓に出たさきぎ、なす、きゅうり、とまとは、すべてトラジャの山地から来たものであった。ここから約25 km西のラマシ(Lamasie)は、ルウ低地内のひとつの中心的集落であるが、そのハリ・バサールにトラジャの野菜が出てくる。ペンカジョアンの人たちはそれを買いにゆくのである。私が滞在中食った現地産の野菜といえば、カンクン(*Ipomea reptans*)だけであった。これはラワ・ラワに自生するものである。

これほどに多い水牛であるが、食用や牛耕用に育てられているのではない。なぜ水牛を飼っているのかと問うと、ステータス・シン

ボルと貯金だという。水牛ぐらい便利な蓄財の手段はないという。少しまとまった金の必要な時には、これをトラジャに売ればよい。昔は水牛をペンカジョアンからトラジャに運んでいったが、いまでは先方から仲買人が定期的にやってくる。少し大きい水牛だと自分の庭先で売って、20万ルピアだという。これは、サゴでは入手しえない大金である。こういう大金をえる手段として、水牛は最も適した存在だというのである。デサ・ペンカジョアンでは、最近の数年をとると、平均して年150頭の水牛がトラジャの仲買人によって買いとられているという。

サゴ採取はこうした水牛放牧とは、むしろうまく両立している。サゴが切り倒されると、その場で皮をはぎ、角材状にされて運び去られる。この角材の運び出されたあとには必ず水牛が集まってくる。切株や、梢先、それにはぎとられた皮に残っている澱粉を食ってくるのである。こうした方法で水牛がえる澱粉量は、それほど馬鹿にならないものではないかと私は考えている。少なくともサゴ林の場合、水田でなら半年しか行えない刈跡放牧が、ここでは1年中行えるような格好になっている。

ペンカジョアンにおけるサゴと水牛の組合せは、このように、いわばそう簡単には崩れえないような状態で、しっかりと結びついて

いる。広大な森の中に住まねばならないという条件、特にそこでの穀類栽培は野豚被害のために至難であるという条件が、こういうサゴ・水牛の組合せの確立にあずかって力があるのであろう。政府は水田の造成を呼びかけるが、地元の人たちには、いまひとつピンと来ない掛け声に響いている。

歴史的にみると、タッカララもかつてはいまのペンカジョアンのような状態であった。しかし、周辺から森の消えてしまったタッカララでは、いまはすでに新しい土地利用が動き出している。それは強いていえば、穀物中心の土地利用である。しかし、人口密度がタッカララの10分の1しかないペンカジョアンは、まだそういう段階には達していない。人人はまだあの低人口密度に適したサゴ・水牛・魚というルウ本来の生活を持続している。

あ と が き

以上に述べたものは熱帯植物資源研究センターの助成金をえて、1982年7月末から同年8月いっぱいにかけて行なった現地調査の報告である。調査を可能にくださった長戸公先生には深く感謝している。本報告は2村で見聞したことを記録するのが目的であり、立ち入った考察はしていない。村人からの情報収集は、私が英語を用い、それがルウ語またはブギス語にほん訳されて行われた。